

論文審査の結果の要旨および担当者

| | | | |
|------|---|---|---|
| 報告番号 | ※ | 第 | 号 |
|------|---|---|---|

氏 名 木村 晶子

論文題目 〈他者〉への共感と対話——エリザベス・ギヤスケルの小説
における〈語り〉の可能性——

論文審査担当者

主 査 名古屋大学教授 松岡 光治
委 員 名古屋大学教授 上原 早苗
委 員 名古屋大学准教授 渡辺 美樹

1. 本論文の構成と概要

本論文は、昨今ますます評価が高まっているヴィクトリア朝の女性作家、エリザベス・ギヤスケル（1810-65）の長編小説における〈語り〉に注目し、その文学の特質を研究したものである。ギヤスケルはキリスト教的人道主義に基づいて労働者の悲惨な現実を描いた社会問題小説によって評価されていたが、20世紀後半にフェミニズム批評が隆盛した以降は、牧師の妻・4人の娘の母としての務めを果たしつつ職業作家として成功したという伝記的側面に焦点が当てられ、その後も様々な批評理論を用いた視点から論じられている。こうした先行研究を踏まえつつ、本論文は各長篇・中篇のテキスト分析によって改めて小説の技法の変化をたどり、ギヤスケル文学が女性作家としての問題意識を深めつつ、他者への共感と対話の表現という主題を様々な形で追求する試みであったと論じている。ヴィクトリア朝の多くの女性作家が当時の女性に求められていた性役割と創作活動との葛藤に直面していた。ギヤスケルの場合は、そうした葛藤を背景に、人物の言語表現の問題を繰り返し取り上げて共感と対話の重要性を表現しつつ、新たな語りを模索していったというのが本論文の主旨である。具体的には、ギヤスケルの最初の作品からジャンル別にはほぼ時系列に沿って小説の発展の過程が入念にたどられ、最後の作品におけるヒロインをめぐるポリフォニックな小説空間を描き出す語りの到達点が提示されている。

本論文は三部構成であり、その前後に序論と結論が付されている。

第一部「社会問題を描いた小説」は、労資対立が激化した1840年代から1850年代半ばまでの初期の長篇3作品を考察している。最愛の幼い息子の死による鬱状態の克服から出発したギヤスケルの文学は、自らの喪失感を創作において他者への共感に変えることで救済を求めるものだった。これらの3作品はいずれも階級社会や家父長制社会の矛盾を日常生活の描写を通して鮮やかに浮かび上がらせる中で、社会的弱者としての他者への共感と〈対話的關係〉の重要性という主題を明確にしている。

第1章『メアリ・バートン』では、労働者と資本家の双方が、敵対する他者に個人として共感することで対話による救済がもたらされており、そこにギヤスケル文学の全体に通じる主題を見出すことができる。ジョン・バートンによる資本家の息子の殺害は、殺人の罪だけでなく対話を奪われる悲劇として描かれており、その苦しみは父の罪を知らながらも語れない娘メアリの悲劇と重なってゆく。この最初の長篇は、ユニテリアン派の牧師で豊かな文学的教養をもっていたギヤスケルの夫、ウィリアムの影響を強く受けており、それまでの男性の文学キャンノンを受容する姿勢をもちつつ、次第に女性の自己実現のあり方というギヤスケル文学の中心的主題を内蔵した作品と解釈することができる。しばしば指摘されてきたジョン・バートンから娘のメアリへの作品主体の変化は、ヒロインが語ることの意味への作者の模索を示すものであり、恋人の冤罪を晴らすために裁判で証言するメアリの姿は、公的領域における女性の語りの力と限界を示唆している。この作品では、客観的に物語を進めるはずの全知の語り手が、子供を失った私の悲しみを突如として語りだすという語りの役割の逸脱もあり、ギヤスケルの小説の発展はこのような〈私〉の感情表出や感傷的な語りからの脱却となっている。

第2章『ルース』では、社会的弱者の中でも特に語るべきでない存在とされていた未婚の母、いわゆる〈墮ちた女〉がヒロインとして描かれ、家父長制社会から排斥された女性に対する共感が求められている。中産階級の女性が性を話題にすること自体がタブーだった時代に、激しい批判にさ

らされつつも性のダブル・スタンダードの不条理を表現しようとしたギヤスケルの強い使命感と新たな語りの領域への挑戦は称賛に値する一方で、その緊張がヒロインの過度の聖性や母子関係の理想化、現実感に乏しい誇張表現をもたらした末に、結末では自己犠牲的なヒロイン像を崩壊させている。このようなヒロインの造形には、堕ちた女を語ること、すなわちタブー視された女性のセクシュアリティを言語化する困難が露呈されていると考えられる。また、『メアリ・バートン』において語れない罪として描かれた殺人の秘密は、ヒロインを救う牧師による彼女の過去の隠蔽と嘘というモチーフに発展して、対話の困難さを示すことになる。

第 3 章『北と南』は、『メアリ・バートン』同様に労資の対立とその解決には対話と共感が必要であることを訴えた作品だが、本論文ではその対話の機会の原点となるヒロインの数々の喪失体験の重要性に着目している。相次ぐ身近な人々の死をヒロインがどのように克服するかが、彼女自身の成長の指標となるだけでなく、死を契機にして他の登場人物間にもヒロインを仲介者とした対話をもたらされている。ギヤスケルの創作の源である愛する者を喪失した苦しみは、ここでは未来の対話へと結びついている。主人公のマーガレット・ヘイルはギヤスケルが描いた最も自立したヒロインであり、『メアリ・バートン』で模索されつつも獲得し得なかったジェンダー規範を超える女性の理想像を提示している。しかし、反逆罪に問われた兄を庇うための嘘によって、彼女が真実を語れないヒロインとなる点には、引き続き女性の自己実現の困難さが暗示されている。

第二部「歴史的事件を描いた小説」では、第一部の同時代の社会問題を扱った作品の後に執筆された 2 作品を取り上げている。時代を遡って歴史的イベントを再現することによって、ギヤスケルはより普遍的な心理劇を目指したと思われるが、物語の中心となるのは家庭の空間における人間関係である。そこで描かれるヒロインは第一部の作品以上に主体を失った悲劇的存在であり、閉塞した家庭空間において語る力を奪われている。公的領域の出来事が私的領域の日常と深く関わる女性の現実が浮かび上がる一方で、いずれの作品でもプロット展開や人物像に過剰な作為性や感傷性があるのは否めない。

第 4 章『魔女ロイス』は、17 世紀末のニュー・イングランドのセイレム魔女裁判の史実を再現しているが、物語は全くのフィクションである。ギヤスケルはコトン・マザーなどの実在の人物を登場させ、セイレムの牧師だったチャールズ・ウェントワース・アパムの著作を典拠としつつも、年配の貧しい女性たちが魔女として告発された史実とは異なる、若く美しい乙女ロイス・バークレーを魔女裁判の犠牲者として描いた。アパムが魔女裁判の迷妄を批判して理性の重要性を訴えているのに対し、『魔女ロイス』ではかつてロイスの故郷で魔女として処刑された老女の呪いの成就というゴシック的非現実性が加えられている。そのため、この作品は魔女裁判の迷妄を批判しつつも、魔女の存在を肯定するという矛盾に満ちた両義的なテキストとなっている。魔女裁判の事件が、閉鎖的な家庭空間において抑圧された女性たちの悪意に満ちた虚偽の語りという言葉の悲劇として描かれ、ロイスが無実を語ることを許されない点も、作者の対話の意義への関心を示している。

第 5 章『シルヴィアの恋人たち』では、18 世紀末のヨークシャーにおける強制徴募とそれに対する反逆事件の史実をもとに、国家権力の悪による悲劇が個人の恋愛関係・家族関係における言語表現の悪の問題として描かれている。強制徴募によってシルヴィアの恋人が連れ去られたことを隠蔽し、嘘をついて彼女と結婚するフィリップ・ヘップバーンと、その事実を知って夫への憎悪の誓いを立てるシルヴィアは、フィリップの臨終間際に和解するが、そこでも対話が重要となる。だが同時に、海辺の波音が個人のあらゆる情念や葛藤を超越した無常の象徴となり、和解の虚しさをも

暗示する。シルヴィアは海の彼方への憧れを抱きながらも、男性の欲望に翻弄されて家庭の空間に囚われる悲劇的存在であり、知的言語能力をもたず、自己の内面を語る言葉も見出せない。男性の登場人物のヒロイズムの限界が描かれているのに対して、密かにフィリップを愛し続けるヘスタ・ローズの絶えざる自己抑制と社会貢献は、私的領域の日常のヒロイズムの新たな可能性を示唆し、この作品に救いをもたらしている。

第三部「日常生活を描いた小説」で扱う3篇は、最も形式的破綻が少なく、ギヤスケル文学の特質が生かされた小説群であり、特に最後の作品は円熟した語りの境地を示している。第一部・第二部で扱った作品では階級制度や家父長制度の矛盾、共同体の迷妄や国家権力の悪に翻弄される社会的弱者の悲劇が、登場人物たちの言語表現に焦点を当てられつつヒロインの日常を通して描かれてきた。第三部では、ヒロインたちの日常生活そのものが中心となって、彼女たちの身近な他者への共感と対話的關係が表現されている。

第6章『従妹フィリス』は、田園賛美と乙女の失恋という主題、ウェルギリウスへの言及からもパストラルを意識した中篇と言えるが、鉄道敷設に示される急速な近代化は、田園自体を非アルカディア的空間と化している。鉄道技師ハウズワスの心変わりによるフィリスの失恋というプロット展開において注目し得るのは、ハウズワス自身の罪よりも、彼の愛の告白を善意からフィリスに伝えた語り手ポールの言葉の罪が強調されている点である。さらに恥とされた恋の告白を父から強いられたフィリスが、一時は重篤な状態になるほどの病を発症する経緯においては、家父長制度においてセクシュアリティを抑圧された女性の語れないことが病という身体表現になっていると解釈できる。

第7章『クランフォード』は、田舎町の淑女たちの日常をユーモラスな筆致で描いた物語だが、その深部にはラディカルな家父長制度批判も潜んでいる。男性の優位性と女性の優位性の共存、淑女たちの保守性と革新的な精神、インサイダーでもアウトサイダーでもある語り手など、様々な点でこの作品を両義的なテキストとして捉えることができる。登場人物たちが次々と語り手に過去のエピソードを語る反復的・断片的形式には、時間を超越する物語の力を読み取ることが可能である。また、最後にクランフォードの町の秩序を回復する鍵となる人物が、物語の名手で〈クイア〉な存在と言えるピーターである点も注目し得る。現在の日常が物語化された過去の集積として生まれることが、独特の語りの構造によって表現されている。

第8章『妻たちと娘たち』は、ギヤスケルの急死によって最終章を残した未完であるものの、彼女の小説の語りの到達点を示す作品になっている。主人公モリー・ギブソンの成長をたどる女性のビルドゥングスロマンとしての要素をもつプロットでは、継母の娘シンシアの秘密を守るためにモリー自身がスキャンダルの標的となるという試練によって、語ることのできないヒロインの苦悩が描かれている。知識欲旺盛で自己犠牲的な生き方に疑問をもつ主人公や、〈家庭の天使〉的な生き方を拒絶する人物たちが新たな女性像を示す一方で、最終的には伝統的な性規範の枠組みを超えることがないのは、女性の自立の表現の限界と解釈できる。だが、ヒロインの恋愛のプロットが多様な社会階層の複数の家庭のドラマと並置されることによって、個々の日常が相互に有機的關係性を持つ社会が浮かび上がっている。日常の細部を観察するミクロな視点がマクロな社会像を形成するこうした小説の空間には、ダーウィニズムの影響も読み取れる。また、語りを意識させないほど語り手の介入が抑えられ、多彩な人物の会話や内省の描写によって物語が自然に進行している点は、第1作『メアリ・バートン』の語りとは全く異なっており、ギヤスケルならではの小宇宙が完成さ

れていると言える。

以上のように、各作品をジャンル別に分析することによって、ギヤスケルが様々なジャンルに挑戦しつつ、常に対話に基づく関係を理想として小説の語りの技法を進化させていったことが判然とする。ギヤスケルの創作行為は自己の内なる情緒や想念の表出ではなく、外へ向かって他者への共感を求めるものであった。その中では嘘、秘密、ゴシップなどの登場人物の語りの問題がプロットの要となっている。語れない弱者としての女性の立場を鮮明に描き出して、家庭という私的領域を超えて語ることの困難を表現し、タブー視されたセクシュアリティの言語化に挑戦した功績は大きい。社会問題や歴史的イベントを描く作品においてギヤスケルが十分な社会的視点を持ち得なかったことは、ヴィクトリア朝の女性作家が直面していた困難を想起させる。だが、形式的破綻にも見える多義的なテキストやジャンルの越境性は、リアリズム小説では語り得なかった女性の感性を表現する先進的な語りの試みとして捉えるべきである。

2. 本論文の評価

本論文は、1980年代末期以降のギヤスケル批評において顕著な作家像の構築やヴィクトリア朝の職業作家としての制約に注目した作品研究を目的とするのではなく、そうした先行研究をきちんと踏まえた上で、それぞれの作品に見出せる〈語り〉の問題を語り手の表現や登場人物の言語との関係という独自の観点から分析したものである。ギヤスケルの語りの問題に特化した従来の批評としては、フェミニスト物語理論の提唱者の一人 **Robyn R. Warhol** が『メアリ・バートン』を取り上げた 1989 年の論文しかなく、それも文体論的な考察であって、ギヤスケルの作品全体に通じる主題との関係を論じたものはほとんどない。本論文のように、ギヤスケルの語りのテーマを女性作家としての小説の技法の問題として詳密に論じた研究は国内外を探しても例がなく、その独創性が審査委員たちの間で高い評価を得た。

他者への共感に基づく対話を重視するギヤスケル文学においては、同時に対話の困難さも暗示されており、〈語り得ないこと〉をどのように表現するかという問いかけが常に見出せるという本論文の指摘は実にユニークである。数多くのギヤスケル作品から例を引いた論証のプロセスにも説得力があった。登場人物の語れることと語れないこと、対話、秘密、嘘といった言語表現に注目することで、小説という表現形式の中で訴えられているメッセージも浮かび上がった本論文は、ギヤスケル研究における新たな成果だと言える。さらには、様々なジャンルに共通する言語表現の問題に注目しながら、女性作家特有の語りの可能性だけでなく限界をも論証しており、偏りのない客観的な知見の提示に成功している。また、ギヤスケルがそれまでの男性的キャノンにおける語りの限界を意識するところから出発し、絶えず新たな語りの領域を模索しつつ最終的に独自の語り的手法を獲得したという仮説の実証も、全作品の入念なテキスト分析によって首肯できるものとなっている。結果的に、ギヤスケル文学の先進性が明らかになるとともに、女性作家の技法の探究と小説の語りの可能性についても新たな視点が生まれている。なお、本論文の日本語は非常に達意であり、読者をぐいぐいと引っ張る論述に審査員一同が感服したことを付言しておく。

本論文の改善すべき点としては、小説の技法としての語りの問題と登場人物の語りの問題との区別が曖昧であること、語りの技法において文体論的特徴やギヤスケルが所属していたユニテリアン派の思想との関わりへの言及が少ないことが指摘された。体裁面では改行ミスが 2ヶ所、文章の途切れと誤字がそれぞれ 1ヶ所あった。論の展開に関しては、語りの分析でナラトロジーの観点から

別紙 1 - 2

の掘り下げが物足りず、次の段落へ移る箇所が見えられた。社会問題が男女問題にすり替わる場面などには、他の場面に影響して新たな読みを生み出すような語りのズレがあるはずで、その議論が本論文の独自性をより高める可能性があったのに残念だという指摘もあった。また、語り手のジェンダーによって語りの制限も変わってくるはずだが、どの語り手も同じように取り扱われている印象を受けた。より細かな点では、本論文で何度も使用される「女性作家ならでの」「女性作家としての」という場合には男性作家と比較する必要があるが、本論文のオリジナリティを強調するためには国内外の先行研究に対する批判をもっと前面に出す必要がある。しかし、これらの問題点は本論文全体の価値を減らす瑕疵ではなく、博士論文の出版前に改善が可能なものである。

なお、第 1 章から第 7 章まではすべて単独の論文として刊行されたか 2016 年 3 月までに刊行の予定である。また、第 3 章から第 6 章まではすべて査読付き論文であり、それによって本論文の質の高さが担保されている。

公開の口述審査は平成 28 年 1 月 29 日（金）午後 4 時半より名古屋大学文系総合館 705 号室にて 2 時間にわたって行われた。まず申請者が本論文の概略を 30 分ほど説明し、そのあと審査委員たちとの間で活発な質疑応答が行われた。その結果、本論文そのものの内容も、口述審査での発言内容も好評を得た。よって、審査委員会は全員一致で、これを博士学位論文として合格であると判断した。